第2群の座長をつとめて

杉　本　定　子
（金沢医科大学病院）

最初に各演題についての感想を簡単に述べ，次に事例を通しての看護を考えたい。

第4席「オムツ外しに関する研究」(その2)このテーマは高齢者社会にあって，今や私達看護者に共通の課題であり，大変な根気と努力のいる事である。患者の気持ちを大切にして，周囲の条件を整えタイミングを見計らって意図的に働きかけていけば，患者に勇気と意欲を与え，成功あるいは前進することを学んだ。—昨年度の老人看護学会で発表された(その1)要因の検討を参考に THE SHUNIN (1990 Vol.3 No.4) 金川先生の論文作成の実際を精読すると，研究内容が一層よく解り，また臨床における事例研究のあり方に示唆を受ける事ができた。

第5席「術後の性障害に於けるアプローチを事例を通して考える」性の問題特に男性に関して，看護婦は真正面より取り組むことを避けてきたように思う。今回術前より積極的にアプローチされた事に敬意を表したい。質疑応答や川島先生のご指摘があったように，カウンセリングの専門技術，家族との十分な話合い，退院後の継続した Follow up の必要性等今後に残された課題も多くある。いづれにしても，性障害の援助を主治医まかせにしないで，患者が自分の気持や悩みを看護婦に相談出来る人間関係を育む事が大切である。プライマリーナーシングへの取り組みも一方法かと思う。

第6席「小児の在宅中心静脈栄養法に関する研究」子どもは出来るだけ家族と共に生活することを基本と考える時，このような研究は意義あると思う。現実には経口摂取出来ないことへのストレス，家族の心理的葛藤，医療費の負担等の諸問題がある。その解決方法を検討し，ＨＰＮ管理が更に発展するよう期待したい。

この3演題を通して，看護を考える時いづれの演題も高度な看護技術やより専門的な知識を探求する研究ではなく，むしろ看護の基本的要素即ち排泄，性，栄養の援助に関する課題である。臨床看護実践の中の身近な問題を素材によりよい看護を求めた研究といえよう。

Clare Dennison 女史は「最終的に，また根本的にいえることは，看護ケアの質は看護をするものの質によって左右される。」と述べているように，私達看護にたずさわる者は常に「人間が人間にかかわるとは，どういう意義があるのか」を認識して，看護者の豊かな人間性と看護観をベースに，患者に深い愛情と誠意をもって接したいと考える。

看護の本質を追求する事例研究が，多忙な臨床の中で高められていくことを期待したい。